

コメント(田中)

外交の要諦は善隣友好

この対談の中で、大平さんは、日米関係、日中関係、日ソ関係のあり方を語り、さらに日米中、日ソ中の現下の微妙な三国関係についても、わが国として採るべき態度をハッキリ示している。とくに中ソ間の対立については「日本としては、こんなことはあまり思い煩わないことです。わけ知り顔して、中ソ関係がどうのこうのと論ずるのはナンセンスです。われわれは、日ソ関係を大事にすること、日中関係を大事にすること、それに最大限の神経を使ってやっつけていかねばならないと思いますよ」と断言している。

中ソの対立をテンピンにかけ、漁夫の利をねらうといった策や略ほど、大平さんの外交姿勢から縁遠いものはなさそうである。外交は下手な策や略を、いたずらにろうすることではなく、善隣友好の平和路線を自主的に淡々と歩めばよいというのが、大

平外交に一貫して流れる信念のようである。

大平さんはいうまでもなく、田中内閣の外相として、多年の懸案であった日中国交正常化を遂げた責任者である。この日中国交正常化のいきさつについて、大平さんは、最近発行された『私の履歴書』（日本経済新聞社刊）の中でつぎのように語っている。

「田中総理と私は、組閣後間もなく、まずハワイに赴き、日米首脳会談に臨んだ。アメリカ側からはニクソン大統領、ロジャー・ス國務長官、キッシンジャー補佐官などが参加された。この会談で、田中内閣はまず日米安保体制を堅持することを米側に約束するとともに、成否はわからないが、日中国交の正常化に手を染めたい旨表明した。アメリカ側は前者を多とし、後者については『その成功を祈る』ということであった。

ただ、私の心配は、わが国が日米安保条約を堅持する以上、中国側が国交正常化の話に乗ってくるかどうかということであった。何となれば、中国側はこれまで、日米安保体制に終始批判的な言明を繰り返していたからである。

日米首脳会談後、私は中国側の出方をジツと見守っていた。ところが中国側は、日米会談後出された日米共同声明には、格別の反応を示さなかった。そこで私は、日米安保条約を軸とするサンフランシスコ体制に中国側が物言いをつけないのであれば、多年の懸案である日中国交の正常化問題は、この際解決しておくべきだと考えた。中国の安保条約に対する態度は、柔軟で現実的になってきたように見えた。もちろん、日中国交の正常化は、政府にとって大きい外交課題であるとともに、すこぶる困難な政治問題でもあった。それだけに、私はこの問題の処理は、内外にわたって十分納得の行く公正なものでなければならず、その実行も熟した時期を選ばなければならぬものと、かねてから考えていた。私がサンフランシスコ体制を損うことがない内容で、国連における代表権問題の帰結が明らかになった時期に、このことに当るべきであると考えたのも、このためであった。国連における中国代表権問題は、前年の秋、劇的な解決をみた。私はこの問題処理の機がようやく熟したと判断し、総理の決断を促して、正常化交渉にとりかかった。

いよいよ交渉をはじめると、中国側は、日米安保条約を軸とするサンフランシスコ体制に現実的な理解を示し、交渉は思ったより、スムーズに進んだ。私は、そういう現実的な理解と、柔軟な決断を示された中国首脳の見識を多とした。幸い日中双方は、小異を捨て大同につき、見解の相違は相違として並列的に書いたり、ヤーヌス（ローマ神話の門口の神、体は一つであるが、顔は二つあった）的な表現を工夫したりして、むずかしいこれらの問題を何とか克服することができ、歴史的な日中共同声明ができたのである。その時は無我夢中であったが、後で考えてみると、よくもこの険路を通り抜けることができたものだ、今更ながら胸をなでおろしている」と。

たしかに、大平さんは日中国交正常化に大きな足跡を残した功労者である。だが、この対談にもあるように、それはあくまでサンフランシスコ体制を損うことがない内容のものでなければならなかった。日本外交にとって重要な軸は、依然として日米の友好関係維持なのである。この意味で、大平外交路線が、吉田茂 池田勇人 佐藤栄作といった自民党の正統派の線上にあることはいうまでもない。

キッシンジャーの大平観

大平さんは「自民党の外交路線は、結果としては米国、中国、ソ連とも国交を回復して、親善関係をうち立て、全面講和の方向に展開してきた」と述べているが、客観的にみても、そうしたコースを辿ってきたことは否定できない。戦後、講和条約締結をめぐつて国論が「全面講和」か「単独講和」かに大きく割れたのは、今なお記憶に新しいところだが、単独講和を採った吉田自由党政権の延長線上にある歴代保守内閣の下で、つぎつぎと、なし崩し的に「全面講和」が進展してきたことは面白い。これは野党の硬直したイデオロギー外交に対する、与党自民党の弾力的な現実外交の勝利といえよう。

大平さんは、日本外交の基軸ともいふべき日米外交をどうみているのか、再び『私の履歴書』を援用しよう。「日本外交の軸は、何といつても対米協調にある。それはひとり、政治や防衛、経済や貿易においてはばかりでなく、思想や文化の領域において

もそうである。二国間の関係で、これほど濃密な関係は少ないし、これほど世界に大きな影響をもっている関係も類例が乏しい。戦後アメリカは世界の民主的再建に希望と自信をもって臨んだ。初期はすべてスムーズに進むかみえたが、その後の経過は必ずしも思うに任せなかつた。ソ連に対しては冷戦から共存へ、中国に対しては封じ込めから和解へ、ベトナムでは介入から収束へと転じた。こうした戦後の経過は、アメリカにとつて大きな試練であつたが、それがそのまま世界にとつてもきびしい成り行きであつた。たしかにアメリカは、戦後世界のために多くのことをなしたが、そのため多くのものを失つたようである。しかし、それにもかかわらずアメリカは今日、依然として世界の大国である。また日本にとつても、かけがえのない友好国であり、パートナーであることに変わりない」

前後二回、通算四年あまり外務大臣として対米折衝に当たつた大平さんは、当然、デイン・ラスク、ウィリアム・ロジャース、ヘンリー・キッシンジャーの三代の国務長官と親しくなつたが、キッシンジャー氏が日本の政治家の中でも、とくに大平さんを高く評価したという話は、消息通の間では有名である。

見るからに才氣溢れる切れ者の同氏が、一見、ヌーボーとして、把えどころのない大平さんを高く評価した理由はどこに由来するのだろうか。

昭和四十八年十月、中東に動乱が起こり、いわゆる石油ショックが全世界を襲った。このとき、大平さんは、わが国の外交路線の変更をめぐってキッシンジャー長官と折衝した。当時、日本の国内では、中近東に対する外交方針を、アラブ寄りに転換するよう強い圧力が生まれた。

大平さんは、このような動きには必ずしも賛成ではなかった。産油国といつても、石油を売らなければ経済はもたないし、日本のような大口の安定した消費国の存在は、彼らにとつても大擧な得意先であるはずであるとの判断に立つて、何もそう周章狼狽することはないと、閣議でも主張した。しかし大勢はその逆で、「バスに乗り遅れるな」とばかり、アラブ寄り外交を求める声は日増しに高まるばかりであった。ついに大平さんは国内的には、孤立の状況に追い込まれた。

たまたま四十八年十一月に、キッシンジャー長官は中東訪問の帰途来日したので、大平さんは長官に、日本政府のアラブ政策を説明し、意見を求めたところ、彼は日本政府の方針に反対で、中近東諸国に対する対応は、米政府に任せるべきだと主張し、

日本が軽々しくアラブに当たることは、むしろその軽侮を招く恐れがあると述べた。そのためキッシンジャー長官の東京滞在中は、ついにその理解が得られなかった。そこで大平さんは、ワシントンの安川大使に訓令して、執拗に交渉させ、その結果、米 국무省もやっと「日本政府の中近東政策の修正には賛成できないが、かかる修正をせざるを得ない日本政府の立場は理解できる」との声明を出してくれたのである。

大平さんは、日米外交を回顧して、「いずれの問題でも、必ずしも意見の一致をみたとはいえない。しかし、外交においては、たとえ合意の達成ができなくても、お互いにその立場を理解し合っていることが不可欠であり、相互の理解と信頼は、合意を達成することに劣らず、重要である。とりわけ日米間においては、このことは絶対といってよいほど大切である」と強調している。

キッシンジャー長官が政治家大平正芳を高く評価したのは、その意見に共通点があったというよりは、大平さんが、独自の言葉と思想で、外交を語りうる数少ない日本の政治家の一人であるという点にあるのだと、私には思われる。

大平さんは決して雄弁ではない。会話の相手としての反応も決して早いとはいえない。いまではテレビの芸能人にもよく真似をされる、細い目をつぶっての、あの「ウ

「」とか「アー」とかいう独得のポーズが、よくそのことを示している。

しかし一見、地味なこのポーズも、実は思考をまとめ、それを表現する言葉の一つを選び抜くためのウォーミングアップなのである。大平さんは当代の政治家の中では、稀れにみる読書家と目されている。本を読むとは、思想を練り言葉を選び抜くことでもある。学者キツシンジャーの論理的思考は、外相大平正芳の発言の中に日本の政治家には珍らしい論理性を発見して、それを評価したのではないかと思われる。

米、中について、ソ連との関係を安定させることが、日本外交の不可欠の課題であることはいうまでもない。この対談で、私が「ソ連は日本にとつて脅威の存在と考えているか」と問い質したのに対し、大平さんは「この国とどういう関係を取り結ぶかは、日本外交の最大の試練だ」と答えながらも、「しかし、ソ連が脅威だからといって、日本はソ連の隣から引つ越すことはできない」と答えている。

外交は昔から地理的要因に大きく左右され、影響されてきた。日中、日ソ関係もその例外ではない。「ソ連に対しては、永遠の隣人として、われわれはつき合わざるを得ない宿命にある」という大平さんの指摘は、一見平凡だが、その底には強い覚悟を国民全体にうながす響きが込められたものとみてよいであろう。